
狼と脇道の物語

ばく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狼と脇道の物語

【Nコード】

N9605F

【作者名】

ばく

【あらすじ】

狼と香辛料の二次創作です。賢狼ホロにロレンスは勿論、日の当たらない場所にいる脇役さんたちも活躍！ホロ視点やエープ視点など、新しい切り口で狼と香辛料を語ります。学園ネタもあり。

第一話 狼と嫉妬心

退屈だった。

あのへたれた連れは組合に顔を出すと言うので留守を任されてやったのだが、予想外に戻るのが遅い。

大方世間話に花が咲いているのだろう。だがこの気高き賢狼を放つて楽しむことができるほどの価値がそこにあるのだろうか。

勿論連れの世間体を保つのも大切なことなのだろうが。

狼の社会に世間体という概念はなかったので、それはそれで斬新と捉えることもできる。その程度の適応すら拒むほど、ヨイツの狼は馬鹿ではない。

だが留守番を頼まれるたびに胸の奥で鎌首をもたげる嫉妬心は止まらなかった。

もしその組合の町証人が見目麗しい若い女であつたら？

それもあの阿呆な連れが好きそうな、いかにも純情で初々しさをたたえた娘なら。

あの女狐にすらたぶらかされかけたのだ。商才を備えた美女ならばひっかかってしまうかも分らない。

それを思うと、ヨイツの冬よりも強い寒気が背筋を虐げにくるのだ。

怖かった。

そしてその恐怖を壊してくれるのはいつも――

「帰ってきたぞー」

あの連れの、間抜けた声なのだ。

第二話 狼と学園生活パート1 (前書き)

この小説は学園ホロたんを読んだことのないへボが書いています。名前の当て字やロレンスとホロの同居設定など本家様から引ッ張ってきた要素もありますが微妙なギャップがあります。ご了承ください。ホロ、ノーラ、コル、アマーティなどが生徒、ロレンスやエーブが教師になってます。

第二話 狼と学園生活パート1

《6月10日》今日あったこと。

農羅^{ノーラ}が校舎内に羊を6頭連れてきたので全部飼育小屋に入れておいた。

甘亭^{アマテイ}が幌魯^{ホロ}に露骨なプロポーズ、幌魯鼻であしらう。

樵^{コル}がまたお弁当を持ってこられなかったというので先生がパンを買ってあげていたのを見ていた幌魯が自分にもとねたる。

「・・・はあ」

炉蓮栖^{ロレンス}は担当クラスのいつものように騒がしすぎる出来事を、やや虚ろな瞳で眺めていた。

何故こんなにも問題児が多いのか。

可愛げがある、の一言でこれを見逃せるほどロレンスは甘くない。

二回目の溜息を吐きかけた時、後ろから低い声が降ってきた。

「疲れてるのか？」

「・・・鋭舞^{エーブ}さん」

立っていたのは同僚で数学教師の鋭舞だった。

パツと見男性に見えるような服装でいつもマスクをしているため、生徒のなかには彼女を男性だと思っているものも多いらしい。

だがマスクを外すとかなりの美人で、何人かの同僚は彼女を落とすために必死だそうだ。

そんな鋭舞が急に話しかけてくるのだから、驚かないはずがなかった。

「疲れた羊飼いに羊がついてこないように、疲れた教師に生徒はついてこない。・・・どうだ？今日あたり、飲みに」

「良い、・・・ですね」

断れない雰囲気かにじみ出ている言葉の切っ先があまりにも鋭いので一瞬身を震わせる。

このまま飲みに行くのも悪くないのだが、幌魯が何と云うか分からない。

遅くに帰ってくればまたあの雌狐と絡んできたのかなどと小言を投げられるのは確実だろう。

少し迷い、思いきって断ることにした。

「・・・ですが、すみません。私も家に帰らないといけませんので・・・また、誘ってください」

鋭舞はまさか断られるとは思ってもみなかったのか、少し肩をすくめて、そうか、と言った。

「でも・・・そうになると面倒だな」

「・・・何がですか？」

尋ねると、鋭舞は苦笑して一通の手紙を見せた。

読め、と目が伝えているので中身を見る。

「・・・北側の地主の息子なんだがな・・・」

愛、好き、という単語が何個出てきたのかも解らない。

虫唾が走りそうな求婚に近い誘いの手紙だった。

炉蓮栖も苦笑いしてみせると、鋭舞は不敵に口角を上げた。

「一丁、裏切ってくるぜ」

その夜、北側の民家周辺では、大の男が呆然と立ち尽くしている姿が目撃された。

第3話 狼と使い走り

「コル坊、次、頼んでいいかや」

「あ・・・は、っはい！」

ふてぶてしく寝台に寝転がるホ口に恭しく返事をし、コルが立ち上がる。

今はロレンスが商店を営む友人のもとに顔出しにいており、二人の飲み食い分としてトレニー銀貨が手渡されていた。

ホ口は退屈そうに口周りをべろりと嘗めると、息を吸い込む。

「林檎と蜂蜜パンと栗の焼き菓子と貝の串焼きとすぐその露店に売ってた肉詰めのおパンとあとはチーズのいいやつとよく寝かせた濃い目の葡萄酒じゃ」

「・・・え・・・っと」

「林檎と蜂蜜パンと栗の焼き菓子と貝の串焼きとすぐその露店に売ってた肉詰めのおパンとあとはチーズのいいやつと良く寝かせた濃い目の葡萄酒」

「・・・は・・・はい」

「ん、あとは確か・・・そうそう、兎の干し肉、なんて珍しいのもあったの。あれじゃ」

「え？・・・つとー・・・」

食べ物を次々追加していくホロの言葉を、コルはその耳から頭へ入れるので精一杯である。

「林檎と蜂蜜パンと栗の焼き菓子と貝の串焼きとすぐその露店で売ってた肉詰め白パンとあとはチーズのいいやつと良く寝かせた濃い目の葡萄酒と兎の干し肉といっておる」

「うっ・・・ごめんなさいっ」

1、2と指折り数えながら単語を消化していくコルを、ホロはもどかしそうに目を細めて眺めていた。

「・・・ぬし、本当に学生だったのかや？・・・わっちは可愛いコル坊じゃかな、なるだけ我が俣は控えておるのじゃが・・・」

ホロが口を尖らせた、その時、急にドアが開いた。

「おいホロ、林檎と蜂蜜パンと栗の焼き菓子と貝の串焼きとすぐその露店で売ってた肉詰め白パンとチーズのいいやつと良く寝かせた濃い目の葡萄酒と兎の干し肉買ってきたぞー」

コルがホロとロレンスの仲を再確認した瞬間だった。

狼と学園生活くパート2 前篇

「よいかぬし、立場というものはな、時を選べば本当に大事なものになることを覚えておいてくりやれ。・・・もう一回、言ってみるがよい」

「悪かった悪かった。もう許してくれ、仕事だ」

「許さぬ！ぬしがわつちに何と言った？言えと言っておる！」

面談室のドアが跳ね返りそんな剣幕で幌魯ホロが捲し立てるので、炉蓮ロレは思わず耳をふさいだ。

それがますます幌魯の機嫌を損ねたようで、しっばがぶわつと膨らむ。

・・・進路相談。

要するにどんな大学に行きたいんですかと聞くだけの、高校一年生対象の面談なのだが、炉蓮栖は北の酔津大学ヨイツがいいと頑固に意見を変えない幌魯に、あそこは遠すぎると言ったのが気に障ったらしい。

幌魯の故郷は北だとは聞いていたが、流石に酔津大ともなると偏差値はバカ高いわめちやくちや遠いわでかなり障害がある。

「だからな、近場の如平大学ニヨミツなんてどうだ？温泉鉱学とかやりたくないか」

「そんなもの知らぬ！わつちは酔津大で決まりじゃ！」

「・・・といっても・・・難しいぞ」

「わっちが落ちるとでも？」

得意げに胸を張る幌魯を知り目に、炉蓮栖は幌魯の成績表に目を落とす。

全てかなりの好成績だ。

だが酔津大は学科も少ない。

幌魯は農業学部志望ということだが、それをやるにしたってまわりは雪しか降らない大寒帯である。

いくら説得しようと、幌魯は意見を変えようとしなかった。

確かにこの執着心ならばその思いは本物なのだろう。

学校としても酔津大生を出したと言えは名に箔がつく。

炉蓮栖はため息をついた。

「・・・じゃあ志望校の記入欄酔津大にしとくぞ。・・・いいんだな」

「うむ、話の分かるやつじゃ」

幌魯は満足したようだったが。

これが後に大問題になるとはその時誰一人知る由もなかった。

狼と学園生活2 後編

「はあっ!？」

職員室では、炉蓮栖^{ロレンス}が声を荒げていた。

いつも物静かな炉蓮栖がここまで驚くことなどそうあるものかと、
鋭舞^{エーブ}をはじめとする教師たちは視線を炉蓮栖のほうへと向ける。

「酔津大^{ヨイツ}が・・・消えた!？」

その一言に、鋭舞は口をお、と丸くする。

「なんだ慎重なあんたらしくないな。知らなかったのか？」

「・・・鋭舞さん! 酔津大は・・・」

「無くなった、らしい。・・・もつともそれがガセなのか本当のことなのかはオレには解りかねるがな」

楼無川^{ローム}あたりでは最も進学情報に強いとも言われる彼女がそこまでいうものか。

炉蓮栖はただあっけにとられていた。

「もともと私営のサークルみたいな学校だったんだ。・・・それが解散したとか言われたところで行きたがる生徒はいなかったよ」

「・・・では本当に・・・」

「ま、だからオレもこれ以上の情報は知らないぜ。どうせあのあんなのクラスの可愛いお嬢さんが志望してるんだろ」

ドキリとして顔をあげると、鋭舞はいつものようにニヤリと笑った。

ここまで彼女が進学情報に強いのはあちこちの塾講師とコネをもっているからだと聞いたことがあるが。

「ん、で。どうするんですか炉蓮栖さん？・・・幌魯さんですね。進路希望用紙、返却しておきましょう」

マールハイト
間或灰都校長にぴらりと薄い書類を手渡され、一応はお辞儀をして受け取ったものの、炉蓮栖の心は重かった。

・・・あいつにどう説明すりゃいいんだ！

炉蓮栖が教室へ戻ってくると、帰ったはずの幌魯が一人で座っていた。

「・・・どうしたん」

「どうもこうもないッ！！！」

「・・・！」

あまりの剣幕に一瞬気押されてから幌魯を見ると、彼女は泣いていた。

「・・・今となりのクラスの泥阿奈先生ディアナが持つて来よった。・・・酔津大志望者には用紙を返却するそうじゃな？」

泣きながら笑う、というのはどっちの感情が強いからなのだろう。

幌魯はまさしくはらはらと泣いて、そしてけらけら笑っていた。

「・・・酔津大は、無くなったんじゃないか。ふふふ、ぬし、知ってたんじゃないかや」

嘲りが強まる。ああ自分は。

「さて幌魯、誤解だっ」

「わっちは酔津大にいくんじゃないっ！！！」

「さて幌魯！・・・酔津大はまだなくなっていないかも知れない！」

「・・・なん・・・じゃと？」

幌魯が思いのほか食いついてきた。

「まだ真相は分からないそうだ。・・・だが如平大に吸収合併され

たかもしれないしまだ存在するかもしれない」

幌魯が笑うのをやめた。

「それは本当かや？・・・ぬし、嘘はいわぬよな？」

「あっああ！本当だっ」

「・・・よし」

何が良いかったのか分からないが、幌魯は急に異常なまでに元気を回復させた。

若いつてすごい、と柄にもなく思ってしまうのは自分が25だからなのか。

「とりあえずわっちは如平大へゆく。・・・ぬしよ」

「なんだ」

ちよつとイヤな予感がして恐る恐る幌魯の顔を見上げると。

「・・・道案内、してくりやれ？」

なんて悪魔だろうな、と炉蓮栖は曖昧な溜息をついたのだった。

狼と学園生活2 後編（後書き）

評価くださった方ありがとうございます・・・！すみませんでした。
応援がありがたいです。

今狼と香辛料のホムペ作りに勤しんでいます。まだかかりますがで
きたら連絡しますね！

なんかイミフな終わり方ですが・・・すいません。ほんとごめんな
さい。また書きますね；；

ローム川の狼と慧眼の商人

「それで、レイノルズの方からは？」

オレが指先で証書を弄んでいると、不意にキーマンに取り上げられた。

ちょっとムツとして見せるとわざとらしく視線をそらす。

「遊びにはつきあっているらしい」とでも言うような表情だったので、胸の中でほくそ笑んだ。

ボンボンが笑わせる。

お前とは泳いできた海の色が違うんだよ。

「届いたのはこれだけなんですか？」

訝しげに尋ねてくるあたりまだオレを信頼しきっていないらしい。

まあ当たり前か。

うつつうしいヤツだなと思いながらぴらりともう一枚証書を捲った。

視線が書類と一緒に動く。

「脱税額と口止め料の詳細はこっちだぜ」

「・・・それを早く言いなさい」

キーマンをいじるのが予想外に面白かったので思わず笑みが零れる。
こんな貴族ぶってるくせにな。

口調は教師みたいで、昔屋敷にいたあの業突く張りの家庭教師を思い出した。

あいつは今何をしているのだろうか？

「・・・ひと桁多くありませんか」

「何が」

「口止め料ですよ」

「ソレは向こう側の人間にも密告を防ぐために十分な額をあてがいたいとか何とか言ってきたから借用書に上書きしてやっただけだ」

どうせレイノルズはこっちの負担だと思い込んでるんだろうが。

バカだ。なんてったってキーマンはロレンスが持っていた書類さえ出されなければ立場は揺るがない。

危険なものは速攻で処分したからな。商館が。

「・・・あなたもつくづく商人ですね」

「さあ？お前も商館の人間くさいな」

「あなたなら娼館ですけどね」

めずらしくキーマンが冗談を言うので苦々しく笑ってしまう。

こいつも少しは話せるじゃないか。

ま、まだ手がキレイなまま終わるつもりで生きているなら話は別だが。

「ま、それよりも今はこっちの取引ですけど」

「当たり前だ、とか言っ**て**ほしいのか？」

声なく笑つと、どこかでレイノルズの悲鳴が上がりそつでちょっと楽しい。

なんとなく、今の生活も悪くないような気がした。

ローム川の狼と慧眼の商人（後書き）

ごめんなさいなんか。難しいこと考えずに書いたので本当にあやまるしかないんですが・・・

この二人が仲良し（？）なの好きです。

なんか最近エーブはロレンスと合わせるもんじゃないなと思いはじめました。

狼と警視庁／金曜ミステリーパロ（前書き）

これはかなりめっちゃくちゃな金曜ミステリーパロです。はつきり言
って刑事ドラマろくに見たことのないばくがしこしこ書いただけの
パロモノです。続きはありません。好評のようでしたらまた考えま
す。

狼と警視庁／金曜ミステリーパロ

凍てつく風が頬をかすめて過ぎ去っていく。

「・・・こんな寒い日にコロシとは・・・」

独り言をつぶやく刑事ロレンスも25歳。

そろそろ殺人事件にも慣れてきたころだった。

砂浜は微かに乾いていて、冬のおいを帯びている。

足元には、素っ気ないレジャーシートがかぶせられた遺体があった。

見ているだけでなんだか空しくなってくるような光景だ。

実のところ、ロレンスはあまりこの手の事件は聞くのも辛かった。
好きな人なんていないと思うが。

「ついてないな・・・」

「やはりそう思うだろう？」

急に話しかけられて振り向けば、エープが立っていた。

相変わらず顔の半分以上を布で覆い、瞳は冷酷ささえ感じさせるような薄い青の光を湛えている。

「御苦労。・・・ロレンス刑事」

「ああ・・・エーブさんもお疲れ様です」

彼女の表情が暗いのは気分を害しているわけではなくいつもの話だ。

「冷えるな。・・・冬の日本海は」

「そうですね。・・・犯人も同じ気圧で震えてるんでしょうか」

「さあな。・・・それは調べないと分からない」

エーブの視線が一瞬遠く霞んでからロレンスを捉える。

「それでガイシャは」

「ああ、フェルミ・アマーティ18歳。・・・近所ではかなり有名なぼんぼんというか・・・そうですね、大手企業の社長の息子だということですよ」

ふん、と小さく一瞥してから、エーブはロレンスが手にした手帳をひったくった。

「長男じゃなかったのか？」

「はい、そうですね。末息子で親離れの志向が強かったということですよ」

エーブから手帳を受取って遺体を眺めると、人ってこんなに大きかったんだっただか、と妙な気分になった。勿論口になど出さないが。

「いろいろありそうだな」

「・・・何が、ですか？」

ちよつと寒気がしたので尋ねてみると、不敵な笑みで返される。

「しがらみだよ」

言い捨てるような口調に棘を感じて顔をそらした。

こういうのは、慣れてない。

「んで？容疑者は」

「・・・3人です」

彼女の眼は説明を促すように物欲しそうだったので簡単に概要を告げた。

一人目。ディアン・ルーベンス。

地元でもかなり有名な占い師で、アマーティとも仲が良かったとの噂がある。

彼女の占いは良く当たると評判だったが、今どき占いだけでは食べていけるはずもなく金に困っていたそうだ。

ちなみに親しい者からはディアナと呼ばれている。

二人目。ギ・バトス。

運送業を営む男性。町の情報通で、アマーティの父の会社とは長い付き合いだそうだ。

二人の間に面識はなかったようだが、会社つながりで殺害を企てた可能性はある。

主に金属を運輸しており、ガイシャの父の会社とは最近こじれていたとのこと。

三人目。マルク。

ギ・バトスの運送会社に勤めるバイトの青年。

年はまだかなり若いが、勤め先である運送会社の賃金の安さと、その理由の大元であるガイシャの父の会社に腹を立てていたようだ。

東北の生まれで、家族とは離れて暮らしている。

「・・・こんなところでしょうね」

愛想レベルに少し笑うと、自嘲に近い笑みを返された。

「この事件、深そうだぜ」

狼と警視庁／金曜ミステリーパロ（後書き）

前書きにも書きましたが続きは恐いので書き（け）ません。好評のようでしたらまた何か書きます。

パロ物好きなので何かいいネタがあつたらご一報を！！

ローム川の狼と彼女の胸中

商人とは何か？

金だけを求め、金のために動き、金を集めることに至上の喜びを感じる生き物。

商人とはどうあるべきか？

行動の基準に金を据え、世界の全てを金で測る。

お前はそんな商人か？

勿論。

目が覚めた。

倦怠感に顔を歪めて上半身を起こすと、そこはさっきまでいた虚無の闇ではなく、安宿の床の間だった。

背中に硬い木の感触がある。いつもの、日常的に感じる痛み。

「・・・夢、か」

商人とは何か、だと。

夢にしてはいささか意味がありすぎるが、現実にしては馬鹿馬鹿しい話だ。

そんなの決まっている。

血の赤色すら黄金に染め返したいと願う愚かな王より更に愚かだ。

血の赤色を黄金に染め返したら、その血で金貨を作って価値を上げてから売りさばく。

なんて世界の狭い生き物だろうか。

でもそれが商人だ。

少なくとも自分はそうだと思っている。

だってその昔、自分の主人はそうだったのだから。

その時はまだ何も知らない無垢なだけの小娘だった。
大人になったのは買われてから。

なんて無知だったのだろうかと嘆いても、もはや自分は独りだった。
人すら金になるのなら、世界の全ては金になる。

それがどれだけ歪んだ思考回路でも今更だ。
歪ませた張本人はもう恨みの対象でもないしこの世にもいないのだ。

あれから恋愛の対象は人から金へと変わった。

求めるのは愛ではなく価値。

金にならないのなら無駄なことはいないべきだし、金で恋愛をする
娼婦なんて身分に堕ちたいと願うほど落ちぶれてもいない。

でも。

「・・・金、より大事なものの・・・か」

あまり思い浮かばない。

命、も全財産を投げうってまで守るようなものではないと思う。

あの男に買われたとき、一度死んだも同然だったし。

他人にそんな少女めいた思いを寄せられるような、そこまで立派にできた人格でもない、

・・・思っていたのに。

なんだか胸の奥が気持ち悪い。

誰のせいかなんて考えたくない。

嘘？

嘘じゃない？

嘘と言って。

・・・本当？

本当にあの生きてきた海の色が違うあの男に？

好き？って、

思ってしまったのか？

・・・溜息をついた。

今日礼を言いに行ったらもう終わりのはずなのに。

この気持ちは、何なんだ？

思考はだんだん、気持ちの確認からどうすれば自分の姿をあの商人の瞼に焼き付けてやれるかに変わっていった。

最後まで素っ気なく終えて、それでいいなんて思えない。

愛情表現？

自分が知っているのは？

・
・
・

（9巻の最後の直前）

不思議の国のロレンス 前篇

そもそもなぜこうなったのだったか。

ロレンスはその日、なぜだかワイズと大きな木の下で本を読んでいて、そうしたらなんだか目の前を懐中時計を穴があくほど見つめながらあーもうどうしてこういう時に限って寝坊なんてするんじゃないもう賢狼の名折れじゃヨイツの仲間に合わせて顔がありんせんとか叫びながら走っていくうさぎ、ではなく明らかに自分が見知っている老獺な狼を見た。

今更子ウサギのふりをしたところでお前は十分俺を食らう狼だよと言おうとしたのと何をそんなに急いでいるんだと尋ねようとしたのとでホ口を追いかけようと思いい立ち上がり走って行ったところで、このバカでかい穴に落ちてしまったのである。

そして落ちた先には純白の廊下に大量のドアと小さなガラスの机、その上に金のカギ。

そしていつだったか読んだ童話にはお決まりの「私をお飲み」のビンがあった。・・・まあ何故か「わっちを飲むが良い、くふ」というあの狼仕様の口調になっではいたが。

そして勿論のこと純白の廊下の先の先のカーテンの裏っかわに指先くらいの大きさのドアがあった。

確かここでは間違えてカギをとらずに薬を飲んでドアが開けられなくなってしまう、流しまくった涙で海ができて、という流れだったはずだ。

だがロレンスは商人である（言い訳になってない）。

「・・・ガラスの机か。なかなか高く売れそうだな」

要するにこの穴からガラスの机と脱出して、知り合いの家具商人が何か市価よりちよつと安く卸してやろうかと考えたのである。

だがそれにはガラスの机を抱えての脱出という大きな課題が残されていた。

しばらくロレンスは悩みとおし、そして思いつく。

「そうか、とりあえず今ここで俺だけ脱出して後で取りにくればいいじゃないか」

この机に乗ればなんとか出られるかもしれない。

ちよつとキズものになつてしまふかもしれないなと思いつつ机を動かそうとした瞬間、

バリィーン!!!!!!!!!!!!

ものすごい音がして「わつちを飲むが良い、くふ」のビンが割れた。やばいと思った時にはもう手遅れで、なぜかビンの中身がどんどんあふれ出して海を作っていく。畜生あの狼図つたな。

気づけばもう口に水が入ってくるような水位になっており、慌てて水をかいて進む。それでもロレンスは子供のころ師に無理やり泳ぎを習わせられたことがあるせいで水泳も割とできるのだ。

服がダメになったら水口の借金を加算してやろうと思案して、回りを見たらやつぱりなんか動物が集まっていた。

ノーラが飼っていたもこもこの羊たちやら自分の馬車馬やら、見覚えのあるものばかりだったが。

それでメエメエヒーヒー愉快な動物さんワールドなBGMの中を抜けだして前を見たら森が広がっている。

全く何でもありだよなと溜息をつく、頭上から声が降ってきた。

「どうした？溜息なんて吐いて」

「・・・チエシヤネコはあなたでしたか」

あの人のことだから絶対面白がって出てくるだろうなと思っていたら案の定。

珍しく顔に布を巻いていないエーブ・ボランその人が、身軽に木の上から飛び降りてきた。

何がしたいんだろうこいつら。

「その顔だとかかなりうんざりしてるみたいだな？」

「当たり前ですよ」

「ここでオレと逢瀬を重ねてる方がいいか？それともどつか別のところに行く方がいいか？」

「エープさんに遊んで頂くのもなかなか魅力的ですが後者にさせていただきます」

もしホロがいなければ本気で彼女に惚れていたかも知れないというのが最近の胸中なのだが、そんなことを言えばエープは遠慮なく大人の遊びをしてしまいそうなので茶化しておく。

「じゃあ道案内だ、右が帽子屋っていうかりゴ・・・おっと口が滑った、んで左に行きやあ三月うさぎつつかメル・・・っとまた口が滑った」

配役はだいたいもう解りましたよエープさん。

というわけでロレンスはいつにも増して冗談の多いエープに手を振って、三月うさぎの家に行ってみることにしたのだった。

不思議の国のロレンス 前篇（後書き）

お久しぶりですこんにちはー。いつもありがとうございます。今回は完全なるパラレルです。とにかくエーブが出したかったんだもん！（コラ

あと遅れましたがエーブが7月放送の狼と香辛料2に出られることが決定していたようで楽しみでしかたないです。朴ろみさんが声を担当と聞いて今からうれし泣きしてます。

前篇後編で分けるつもりですが中編はさむかもですね。では次回をお楽しみにー。

不思議の国のロレンス 後篇

チエシヤネコというかあの愉快な女商人が教えてくれた通りの道を進むと、なんだか妙に似合っているシルクハット姿の帽子屋というカリゴロと、不格好なウサ耳がついているくせに服装はシスターという教会の連中が見たら叫びながら追いかけてくるような服装のメルタがお茶を飲んでいた。

そしてお約束、時計は3時で止まっている。

「やあ、お客さんですか？久しぶりの来客ですね」

「ああ・・・リゴロさんですか」

「フルール・・・ではなくてチエシヤネコに道案内されたんですね。どうぞ、お茶でも」

お茶でも、というよりむしろお茶しかないのではないかという位むせかえるような茶葉の香りに包まれながら、ロレンスは手渡されたティーカップに軽く口をつけた。

「お代わりもありますよ」

柔らかくメルタが微笑んでくるのでこちらも商売用の笑みを返す。

「なかなか良いお茶の葉ですね」

「ええ。私は神の血よりもこちらの方が・・・と、今は聞かなかつたことに」

なんだかどこかで聞いたことのある冗談を笑顔で流しながらさつさと礼を言い、ロレンスはまた道を進むことにした。いつまでもこんなところで足止めを食らわされているなんて商人にはたまらない。

それこそエーブ・・・ではないチエシヤネコの言葉を借りれば発狂してしまうような感覚なのだ。時は金なり。うんいい言葉だ。

道はその先も壁紙のように同じ風景が繰り返されている。花がそよぎ木が数本たたずむメルヘン極まりない道だ。

この次は確か。

・・・やっぱりあつたぞ大木にはめ込まれたドア。

とりあえずポピュラーな筋書き通りにノブを回すと、ギーとか変に間の抜けた音がしてドアはあっさりと開いた。

見上げれば勿論のことあるのは白いバラを赤く塗るトランプの男・・・ではなくなぜか商館で会ったときと同じ格好でペンキを塗っているルド・キーマンその人だった。

「・・・キーマンさん、何をされてるんですか・・・」

「おや、御存じなのではありませんか」

こんな時まで分かりにくい商人的な話し方をするなど言いたいところだが、キーマンはこれでも組合のなかでは自分より立場が上にあたるのでこちららも遠まわしに応えてやる。

「あいにくとまだ狼は罔のままのようです」

「それは大変ですね。今はネコに化けているというわけですか」

キーマンは一目で商売用と分かる華やかな笑みを浮かべた。

「女王の御所望ということですか？」

「まあそうでしょうね。あなたがこの話を肯定的にとらえているならばの話ですが」

いちいち言い方に文句をつけたくなるが、とりあえずこれ以上有益な話はなさそうなので一礼して道の先へ行った。

何なんだ一体、ハートの女王！

そして出くわすのは女王のパレードみたいに飾り立てられた行列だった。

ふんぞり返って進む側近たちもレメリオとかリーベルトとか見たことのある連中ばかりなので、では女王は一体誰なのかと顔を上げた時。

「え」

・・・神輿の上のノーラと眼があった。

「あ、ロレンスさん」

普通に上から笑ってお辞儀をしてくるハートの女王というかノーラ・アレントに挨拶を返してしまったところで雰囲気のにまれていることに気づく。ちよつとまてなんでノーラが女王なんだ。

「こんにちは、お久しぶりですね！えっと、これから裁判なんですが一緒にしませんか」

知り合いをその場で裁判なんて物騒極まりないものに誘えてしまうほどこの人は鈍かったのだったか。

だがここから抜け出すには行動しなければならないので、素直にロレンスは馬具のような飾りがじゃらじゃらくつついた羊の行列に加わったのだった。

裁判は混沌だった。

被告はなぜかあの気の弱い少年のコル。王子という設定にしては着ているものが貧相すぎるような。

罪状はノーラ、ではなくハートの女王が焼いた羊のパイを食べたと

かつておいそれは犯人をオレが知ってるぞそいつの名前はホ口だ！
だがなぜかその混沌裁判は平然と勧められ、なんだかコルも空氣的
に反論できないらしく黙りこくっている。

ちよつとまで、と声を上げようとしたとき、

「ぬしょ！」

ホ口の声で目が覚めた。

慌ててあたりを見回すとホ口が心配そうにこちらを覗きこんでいる。
なんだ夢か、と思った瞬間。

ロレンスはホ口の口元についた羊肉のにおいがする食べカスに気づ
いた。

不思議の国のロレンス 後篇（後書き）

お久しぶりですばくです。

たくさん反响ありがとうございます！

アリスは元の話がうる覚えだったので妙なところもあるかと思いますがそのへんは流して下さると嬉しいです。

あと図々しいかもしれないのですが、リクエストなどがありましたらお待ちします。

シュチュエーション（例：ロレンスとエープで甘甘、商人ばかり座談会など）リクなんかがあればほぼ100パーセント消化しますのでよろしければ感想扱いで送ってやってください。

浦島ろれんす〜パラレル昔話〜

最近は貴族連中の中で魚料理が流行しているらしい。

そんな話を聞いて、ロレンスは独り考え事などしながらゆつくりと海岸を歩いていた。

なんでも教会に新しくやってきた神父はいくらか料理人と医師の心得があるとかなんとかで、七つの大罪のうちのひとつ・大食に対する罰が痛風であることを一生懸命に説いたのだという。

痛風は日ごろの食生活を見なおせば簡単に防げるものであるので、肉を控え魚を主菜にするべきだ、と。

貴族は常に退屈で、何でも良いので何かに凝ってそれを紛らわすのが好きだ。

というわけで今魚料理を好む貴族が増えているらしい。

ロレンスはあまり魚介類のような腐りやすいものは扱わないのだが、この機に便乗してみようかと思い漁師に相場を尋ねに行こうとしている最中なのである。

魚は旬が難しいしな、と思っていると、

・・・見知った顔の誰かさんが見知った顔の誰かさんをいじめているのが見えた。

「もうあんたにご機嫌うかがいする時代は終わっただよ！オラオラー！」

「やつやめてくりやれえつ、尻尾は、尻尾だけはああつ」

・・・ヤレイとホロじゃん。

ロレンスは前回のような面倒事に巻き込まれるのはもう御免なのでそのまますたと歩いて行こうとしたのだが。

「たまに不作にしゃがつて！それで不作で実の小さい麦をこれは相場が低いからダメとかいって買いたたきやがつて」

「やつやめてくりやれえ、わっちにやるくらいならその麦を買いたたきおったへたれを蹴り殺してくりやれっ！」

なんで矛先がオレに向く！！

あとホロ言ってることさりげなくグロいぞ・・・と思ったがロレンスは結局ヤレイにさつとトレーニー銀貨を握らせてホロを助けてやった。

「ほら、もう大丈夫だぞ」

「ん、ありがと。わっちがこうして生きておれるのもぬしのおかげじゃ」

ちよつと怖いくらいの上等な褒め言葉を言われて背筋がうすら寒くなつたのは勿論そのあとの予兆というやつだった。

「なあぬし？」

「・・・ん、なんだ」

「・・・竜宮城、行きたくないかや」

行きたくないですごめんなさい勘弁して下さい許してホントムリですからとか言えないんだロレンスヘタレだもん。

でもロレンスはちよつと頑張ってみる。

「いや、今はー・・・」

んで負ける。

目の前には山盛りの林檎をもらつた時よりもにんまりしている、つまり「プレッシャー掛け顔」の水口。

「・・・ぬし、行きたいであろう？」

「・・・はい行きたいです」

勿論先は大波乱。

浦島るれんす〜パラレル昔話〜（後書き）

お久しぶりですばくです。

ついに原作、エーブが短編進出しましたね！おめでとう！！

というわけで遅くなりましたがパラレルシリーズで昔話を。乙姫はもう誰だかだいたい分かってますよね？

浦島ろれんす ー後編

ホロは砂浜からさつと立ち上がり、膝についたほこりをさつさと払うとロレンスに指で指図した。

「ほれ、ぬしよ。乗るが良い」

・・・はい？

ホロさんあのーまだあなた人間の姿ですよ。

「何を臆しとるんじゃ、ヨイツの賢亀ホロとはわっちのこと！ほれ乗るが良い」

ホロさん、ホロさんて狼だったのではなかったでしょうか。

恐る恐るロレンスが少女のままのホロにまたがると、ホロはそのまますいすいと水の中を泳いで行った。

何だろうこの妙な光景は・・・。

なぜだか息のできる水中に、竜宮城（？）はあった。

というか外見はモロケルーベにあった組合の商館なのだが・・・。

「ん、ここじゃここ。ぬし、入るがよい」

自慢げにデカイ扉を指さすホロがなんだか組合に入ったばかりの時商館を案内してくれた師匠の友人に重なって、複雑な気分になる。

何が仕掛けてあるか分からないし、またどうせあの人は面白がつて出てくるだろうからもつと油断ならないよなと思いながらゆるゆると扉を開けると。

・・・中にはやっぱりあの人がいた。

「あなたもヒマなんですな・・・」

「暇か、だって？商人が金儲け以外の楽しみを見出せるほど魅力的なものをお前は見つけたって言うのか」

そう言っただけで笑うエーブ・ボランその人に、ロレンスは苦笑いを返すしかなかった。

「今のところはあなたの暇つぶしを見ることも楽しみの一つになりつつありますよ」

「それは光栄だな、なら一晩中お前のヒマをつぶしてやっても・・・」

「丁寧に断りいたします」(即答)

オトナ発言は控えて下さい。全年齢ですよここは！そんなに大人になりたいならエーブさんはムーンラ・トノベルに行って下さい帰ってこなくてもいいので。

黙ってれば美人なのに口を開くからもつと美人なんだよこの人はとなんだかよく分からないことを考えながらロレンスはエーブに背を向ける。

「お、もう帰るのか」

「生憎と海には仕事で来ていたもので」

「そうか・・・なら」

エーブはそう言うとおもむろに荷物を引っかき回して箱を取り出した。

黒い漆塗りの東国っぽい箱だ。

「餞別だ、持って行け」

「はあ・・・ありがとうございます」

野球部の先輩みたいだなと思いつつロレンスが箱を開けようとする
と、エーブは手でそれを制した。

「開けるな」

「え？」

金が使ったためにあるように箱もまた開けるためにあるのではないか
と思ったのだが、いつになく真剣なまなざしのエーブには勝てない。

「お前の身のためだ。・・・やめとけ、開けるなよ」

「・・・はい」

何か引つかかったものが残る中、ロレンスはお茶目な女商人に見送
られて竜宮城を後にしたのだった。

・・・その後。

「ん・・・こりゃいい塗りだ。本当にトレーニー銀貨3枚なんかでい
いんだな？」

「ああ、ちよっとつてがあって貰ったものだからそれでいい」

「毎度おー」

ロレンスはばっちり古物商に箱を売りましたとき。

狼とローム川の狼

「ぬし、いつまで黙っているつもりなのかや」

沈黙に耐えかねて口火をきった。

所用で席を外しているロレンスに用事があるとかなんとかでこうして女狐と一緒に息苦しい部屋の中に押し込められている、そしてそれに耐えている自分をほめてやりたい。

あからさまに怒ったような口調は向こうが表情も読めないお子様なんだろつという若干の皮肉を交えての選択なのだが、この女商人こうして自分が見下されていることも気づいているようで更に腹が立つ。

これでもほのかに微笑しているのだからこれでは馬鹿にされているのは自分じゃないか。

「わっちも子供ではありんせん、いつまでもいつまでも練り上げた飴のようにねちねち怒りたくはない。だがそうやってわっちが目の前にいると言うのに何一つ言葉をかけてこぬのもわっちは馬鹿にされているとしか取れん」

「クク・・・」

ちょっと冷静さを欠いてしまったと思った瞬間に女狐の口から笑いがこぼれた。

不愉快だ。ああ実に不愉快だ。

こんなに不愉快だと思ったのはもう何百年ぶりだろうか。

・・・思い返してみると昨日市場でエーブと連れが立ち話していた時も同じ気分だった。

イライラするのをなんとか押さえつけると、エーブのほうに向きなおる。

眼を見るとなんだか鷹に睨まれたような気分になるので首のあたりを見る。

無骨な布に隠された首はさぞ細かろうと思ったところでかすれた声
が耳に入ってきた。

「慎重そうなああの男が惚れこむのだからどんな素敵なお嬢さんかと思つたら、こりやあなかなかの上物じゃないか」

上物という単語は耳に引かかる。何なんだこの女。ヨイツの賢狼ともある自分を魚のように。

魚といえばあのクメルスンの男の子を思い出す。あの子がこの女を見たら何と言っだろう。

商人を辞めなくなるかもつと目標に燃えるか、後者はちょっと若々しすぎるし前者は爺臭いかのうと思案したところでエーブの鋭い視線がこちらに向けられていることに気づく。

「・・・ま、オレはあんたたちの蜜月に口を出す気はさらさらない。

もつと言うとあんに殺されそうくらい睨まれる権利は誰かさんとの痴話げんかのときに譲ってやりたいんだけどな」

お前に心配されなくても連れは浮気できるほど根性据わってない、
と言いつ返せないのは相手がエープ・ボランその人だから。

確かに容姿では多少自信があるがエープの素顔はあのへたれを誘惑してありあまるくらいの美女であるし、現に連れは二度三度悩殺されかけているのだ。

ビールの回し飲みだつて連れがもし商人でなかったら即刻鳩尾に一
発入れているところだった。

どうせ自分が嫉妬することも計算に入れているんだろうと思うと尚
更むずがゆくなってくる。

油断ならない。不愉快だ。

ポーカーフェイスでいるつもりだったのにいつのまにか眉間にしわ
が寄っていたらしく、また女商人にくすくすと笑われた。

その時なんとなく瞳の青色が揺らいだ気がしたのは気のせいであつ
て欲しい、かも、知れない。

「あんたも相当、愛されてるな」

一瞬間があつて、え、と思う。

エープの言葉が何を意味しているのかが解らなかったからだ。

と、軋むような音が頭をかすめた。

「……………ホロ」

ドアが開く音。

苦笑いの連れ。

……………どうやら立ち聞きしていたらしい。

「すみません、連れがお見苦しいところをお見せしまして」

「いや、若々しくてよかったぜ。アロルドと話しても盛り上がらない話だったからな」

これには流石の自分でも唇をかみしめざるを得ない。

女商人は虚空を見上げてつぶやく。

「……………あんたらを見てるとオレも昔を思い出すぜ」

この女、そこまで悪い奴じゃなかったのかも、と感じた瞬間だった。

狼とローム川の狼（後書き）

お久しぶりです。

ついにうちの嫁が色つきで動いてくれました。OP見てエーブのとこだけ止めてうわあ脚エロいゝ視線鋭いゝ持つて帰りたいゝと騒いでました。ほんとあの人は無限の色気を持っていると思う。

それにしてもアニメという構成になるんでしょう。エーブ出しちゃったらその先まで話続いちゃうのに。4巻の二人が不憫すぎるよなあと思いつつ、それでも嫁の活躍を祈って見ています。制作陣にうちの嫁が気に入られたようで良かったです。

今回はホ口と会話させてみました。嫉妬心全開なホ口と一枚上手なエーブが書きたかったのです。

それではまたこれからも見てやってくださいね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9605f/>

狼と脇道の物語

2010年12月19日14時37分発行